

フィヒテとニックリッシュ経営学

——ドイツ理想主義の継承——

森 哲彦

I 序

ドイツ経営経済学、第一次方法論争、いわゆる私経済学論争¹⁾は、私経済学と国民経済学、私経済学のもつ性格、理論科学と技術論、企業者の位置づけ、商科大学での私経済学の成否等各問題について、1910年代初頭に展開された。その私経済学論争者のうち、ニックリッシュ(Nicklisch, Heinrich 1876-1946)は、経済的自由主義の立場から、理論科学としての私経済学を、マンハイム商科大学時代に初期の著書「私経済学としての商事経営学」²⁾(1912年刊)において、主張している。しかしニックリッシュは、その後、ベルリン商科大学時代の1920年代に入り、ドイツ理想主義精神に基づく中期の著書「組織論」³⁾(1920年刊)と「経済的経営学」⁴⁾(1922年刊)へと転換するものとなる。しかもこの転向する時点は、文献史上、実に第一次大戦中の1915年7月に行われたマンハイム商科大学での開学年次式典での講演録(論文)「利己心と義務感」⁵⁾によるものとなっている。

ニックリッシュの思想を転換させた基軸は、戦争であるが、ここでは、その講演録の精神を形成するものが、誰の理想主義哲学に基づいているのか、そして理想主義精神のうち人格主義か楽天観のいずれかが、問題となる。なぜならニックリッシュが講演論文で取り上げた哲学者は、カント(Kant, Immanuel 1724-1804)とフィヒテ(Fichte, Johann Gottlieb 1762-1814)のみである。しかしながらシェーンプルーク(Schönpflug, Fritz)によれば、ニックリッシュに最も強くかつ最も決定的な影響を及ぼしたのは、おそらくフィヒテである、⁶⁾とする。確かに、このシェーンプルークによる指摘は、ニックリッシュ思想転換の解明にとり、基底적と思われるのである。この点を討究するために、ニックリッシュ講演論文に関連して、次の三点を検討しておきたい。すなわちカントとフィヒテの相違として、ここでは、一、哲学の社会的背景、二、哲学の内容、三、後代への影響である。

第一、哲学の社会的背景。カントは、啓蒙専制君主フリードリッヒ大王(Friedrich II, der Große 1712-1786)の統治期に、思想形成を遂げ、フィヒテは、フリードリッヒ亡きプロイセンが保守的な反動的風潮によっておおわれた時期、さらにフランス革命に直面し、危機を意識して、ドイツ君主たちが反動化を強めていた時期、そんな時に、思想形成の歩みをはじめていた、⁷⁾という質の相違があるということである。一方、ニックリッシュが講演を行った時期は、第一次大戦中の正にドイツ危機の時であり、さらに講演中に、フィヒテの「ドイツ国民に告ぐ」の楽天観を実現すると述べていることは、注目に値するものである。

第二、哲学の内容。カントは、その著「実践理性批判」⁸⁾において、啓蒙思想の克服をめざし

て、実践理性の優位性を明らかにし、因果の必然を自由のもとに従属させようとした。しかしカントは、形式と内容をきりはなすことによって、自由と必然、人間と自然とをきりはなす静的な二元論的な世界観にとどまっていた。⁹⁾ これに対し、フィヒテは、カント哲学の制限を克服して、カントよりはるかに、実践性と行動性を有し、人間の自由と自由な社会の激しい情熱のある動的な一元論的な世界観の確立に向っている。⁹⁾ 一方、ニックリッシュは、戦争を戦い抜くという行為のため、ドイツ国民が利己心を克服し、義務感をもって、カントよりも、フィヒテのように人間の行為とその実践について情熱的に語りかけているのである。

第三、後代への影響。ドイツの思想家、ハイネ (Heine, Heinrich 1797-1856) は、フィヒテについて、1834年の著書「ドイツの宗教と哲学との歴史のために」で次のように述べている。「カントの場合は『純粹理性批判』¹⁰⁾ という一冊の本をよく研究しさえすればよかった。ところがフィヒテの場合には、著書だけでなく、人間そのものが問題となる。フィヒテという人間では、思想と情操とが一致している」¹¹⁾ とし「また思想家たちは、フィヒテの述べた思想によって今なお鼓舞されている。フィヒテの言葉が後世にあたえた影響ははかりしれないものがある」¹²⁾ としている。フィヒテを評価することにおいては、急進的自由主義者ハイネや後世の新理想主義の潮流に属するオイケン (Eucken, Rudolf 1846-1926) 同様、ニックリッシュもその潮流の一人であるといっていよいであろう。

本稿では、ニックリッシュが講演論文で取り上げることになる、フィヒテの哲学思想としての基礎論「人間の使命」¹³⁾ (1800年刊) と応用論「ドイツ国民に告ぐ」¹⁴⁾ (1808年刊) を、そしてニックリッシュにより取り上げられなかった今一つの応用論「封鎖的商業国家」論¹⁵⁾ (1800年刊) を解明し、その成果との関連で、いわば第二の「ドイツ国民に告ぐ」と言うべき、ニックリッシュの講演論文を、全体として相互関連づけ、その思想史的意味づけを行おうとするものである。

II ナポレオン戦争とフィヒテ

1 フランス制圧下のドイツ

1789年7月14日に勃発したフランス革命は、フランスの大衆動員とジャコバン黨員に導かれ、世界市民的理想から、封建制度の廃止や人権宣言を行い、新たな国民理念を、後進諸国東ヨーロッパにもたらすことを、その使命としていた。これに対し、「旧権力」とりわけオーストリアとプロイセンは、すでにフランス革命の勃発と同時に、この「(旧) 秩序」の側に断固として立ち……革命に対する王冠の団結という考え方¹⁾から、1792年4月に宣戦布告を行った¹⁾。そして1793年にイギリス、オーストリア、プロイセンなどによる第一次対仏同盟が結成されると、²⁾ これ以後、断続的ではあるが、列国によるフランス革命への干渉戦争は、³⁾ 拡大していった。すなわち、フランス革命が、ナポレオン戦争を引き起こしたのである。

しかし対仏同盟内において、その一員であったプロイセンは、ポーランド分割のため、ライン左岸のドイツ領を割譲する意向を示して、1795年に対仏同盟から離脱した。⁴⁾ 他方、同同盟のオー

ストリアとロシアの連合軍は、ナポレオン軍に1805年12月アウステルリッツ（ウィーン北東方）において完敗し、オーストリアは屈服し、ロシア軍は退却した。⁵⁾ また神聖ローマ帝国は、翌1806年7月、西南16諸邦から成立していたライン同盟に離脱され、滅亡した。このようにしてナポレオンの大陸支配は揺るぎないものとなり、ヨーロッパ連邦の統一を進めようとするフランスの鋒先は、〔中立国〕プロイセンに向けられて来た。⁵⁾ ナポレオンの謀略的挑戦に乗ったプロイセンは、対仏同盟としてではなく単独で、1806年9月に宣戦したが、⁵⁾ 同年10月14日に、イエーナ・アウエルシュタットに敗戦した。そしてプロイセンは、屈辱的なティルジット和約を翌1807年7月9日に結び、⁶⁾ それによってエルベ川以西のプロイセン領は北西ドイツ諸国と共に、ナポレオン支配下におかれ、ポーランド分割で得たプロイセン領土は、ナポレオンによりワルシャワ大公国にわたった⁷⁾のである。またフランスは、イギリスに対抗する大陸封鎖（Kontinental Sperre）・ベルリン勅令を1806年11月21日〔から1813年10月〕に出し、いくらかの利点はあったにも拘らず、長期的には、大陸の経済生活を損なうことが明かになった。⁸⁾ とはいえそのことにより、フランスの大陸体制それ自体を崩壊させるというものではなかったのである。

こうして全ドイツは、一貫してフランスの制圧下におかれていたが、プロイセン王国の大臣・シュタイン（Stein, Heinrich Friedrich Karl 1757-1831）は、1807年10月に土地所有の自由と農奴制廃止の勅令、1808年に市町村に自治をもたらす都市条例⁹⁾を施行することにより、国家改造を行い、近代国家として、更生する道を開いた¹⁰⁾のである。そこには二つの動因が結合されている。それはフランス革命の概念からもたらされた、ドイツ的自由の確立とフランス支配に対する反抗としての民族主義、国民理念の確立との結合の試みでもあった¹⁰⁾のである。このドイツ的自由の確立と祖国の解放という二つの目的を追求することにより、新しい共同体感（neues Gemeinschaftsgefühl）が生まれた。それはドイツ人の自国に対する関係を決定的に変えたのである。それまでこの関係において、特徴的だった身近な故郷への無反省な愛に代わって、国家的営為と国民的営為への参加を道義的任務と把握し、新たに発見された共通の祖国への奉仕のうちに、すべてのドイツ人を拘束する義務（Pflicht）を認識する新しい意識（neues Bewußtsein）が生まれた¹¹⁾のである。

このようなフランス制圧下のドイツにおいて、啓蒙主義以来起こっていた精神的再生（geistige Erneuerung）を土台にした¹²⁾ドイツ古典主義の思想家フィヒテは、フランス革命を賛美すると共に、他方で、ドイツにおける人間の自由と自由な社会に希求がみだされず、ドイツの精神的自覚を訴え、苦闘の時を送っていたのである。その自由のないままに発展してきた時期の所産は、フィヒテの人間論としての「人間の使命」、国家論としての「封鎖的商業国家」論および国民論としての「ドイツ国民に告ぐ」として上梓され、結実したのである。

2 フィヒテの人間論、国家論、国民論

フィヒテの学説は、イエーナ大学時代の1799年に行われた無神論論争（Atheismusstreit）の時期を境に、大きく前後二期に分けられる。¹³⁾ フィヒテは、前期¹⁴⁾において、カントの批判哲学、

実践理性の優位の立場を徹底し、その哲学を自我 (Ich) と事行 (Tathandlung) を中心概念¹⁴⁾として、知識を自我のみによって説明しようとした。¹⁵⁾ すなわち物自体は、独立な存在ではなく、自我の対立として自我の反立させられた非我に他ならないのである。これに基づいてフィヒテは初め、道徳や法律の基礎を論じたが、宗教については未だ説くところがなく、¹⁶⁾ 揚句にその主宰する「哲学雑誌」に掲載したフィヒテの知友フォルベルク (Forberg) の懐疑論的無神論「宗教概念の発展」のために、フィヒテが無神論者の嫌疑を受けて、ベルリンに移り、¹⁷⁾ 神の实在性についての思索が深化され、後期第一の著書「人間の使命」において、初めて、宗教論を包括的に展開したのである。

1 人間論

「人間の使命」は、無神論論争の思想的帰結を整理し、三部作により書かれ、絶対的实在の自己啓示の過程が叙述されている。¹⁸⁾

第一編は「懐疑」と題し、自然主義的实在論の立場を叙述し、現存するものはすべて (Alles was da ist) くまなく限定されている、¹⁹⁾ とし、自由を現実と認め、²⁰⁾ させないこの立場では、自然の体系と自由の体系の二律背反を十分説くことが出来ない、²¹⁾ とする。

第二編は「知識」と題し、その二律背反を克服するもの²²⁾として、实在論の立場から来る制限を克服するために、主観的観念論の立場を展開するが、結局、知識の体系 (System des Wissens) は、必然的にあらゆる实在性 (alle Realität)、意味目的を持たぬ単なる表象の体系、²³⁾ となり、世界は夢に帰するものとなってくる。そこで自然主義的实在論と主観的観念論の二つの立場を克服するために、新たなる道を求めるものとなる。

第三編は「信仰」と題し、道徳的活動の目的として、客観的实在を信じること、²⁴⁾ そしてその際、ニックリッシュも1915年講演論文で引用するように、²⁵⁾ この〔無限的〕意志 (Wille) は、私を自己自身と結び付け、その同じ〔無限的〕意志は、私を私のような人々のすべての究極的な本質と結び付け、そして私達すべての普遍的な媒介者である、²⁶⁾ ということを必要とするのである。従って人間の使命は、地上的世界の到達すべき目標でなく、地上的世界を超越する所に神の摂理を信じ、我が活動を神の活動とするところである、²⁷⁾ とするのである。

フィヒテの人間論が、このような観念論にとらわれたものであるとはいえ、人間の自律と自由、人間の解放を基礎づけようとしたのは、ドイツ国民が、フランスの制圧下と未成熟な市民社会に埋没することを回避しうるとられた道に外ならないのである。このようなフィヒテ人間論の観念性のうちにも、フランス革命を絶賛し、専制や絶対主義を批判するかれの国民意識の政治姿勢が脈打っているのである。次にこれを受けてフィヒテの法哲学に基づく国家論は、後期第二の著書「封鎖的商業国家」論に集約される²⁸⁾ものとなっている。

2 国家論

「封鎖的商業国家」論は、均しく人類全体の歴史や国家民族の立場を表面に押し立てて、論述

したものである。³⁹⁾ この著書も三部作により構成されている。³⁹⁾

第一編「哲学」は、原理を挙げて理性国家を説き、そこでは、理性国家における商業取引に関して合法的であること、真に人間らしく地上において人類が生きるということは、人類にとって単なる叶わぬ望みでなく、人類の権利と人類の使命との必須の要求である、³⁹⁾ としている。そしてこの事態を保証するには、所有権の確保が問題となる。だがこの問題の解決には、「所有権」それ自体にあるのではなく、すなわち一つの物の排他的所有でなく、一定の自由な活動に関する排他的権利 (ein ausschliessende Recht auf eine bestimmte freie Tätigkeit) を行使すること、つまり労働さらに分業によって達成されるものとなる³⁹⁾のである。フィヒテによれば、国家による社会的分業の自覚的統治という形で、³⁹⁾ 商業取引は支配されるものとなる。そして活動のための所有を、国家がかれらに安心して与うべきであり、保障を果たすべきである、³⁹⁾ とすれば、外国との取引を制限して、いわゆる封鎖的商業国家を形成しなければならないものとなるのである。

第二編「時代」は、理性国家を基準とし、時代の現状を批判する。そこで、時代の現実の諸国における商業取引の状態についてみると、そこにはいわゆる差額貿易論としての重商主義政策が行われている。この重商主義のねらいは、それらの政府が……収納されるべき公課の維持ないし、その増加に注意をはらうことによって、他国に対する自己の戦闘力 (kriegerische Macht) を心掛けてきたということ、³⁹⁾ である。そしてその相争う商業利益 (streitendes Handelsinteresse) が、戦争の真実の原因であることがしばしばである (戦争には他の口実が与えられるのであるが)。³⁹⁾

ということは、逆に、政府の第一目的である、国民の平安の維 (Erhaltung der innern Ruhe)³⁹⁾ に反するものとなるのである。これを時代の現状の危機であるとするのがフィヒテの認識であり、この認識は、貿易差額政策としての重商主義政策への批判となり、産業保護政策としての重商主義政策³⁹⁾となって現れるのである。

第三編「政策」は、現状の歴史的事実を哲学的原理に従わしめる技術である。すなわち理性国家では、現状の商業取引は止揚されねばならず、そのためにかかる重商主義政策に基づく外国商業取引を封鎖する政策が論じられるものとなる。この商業国家封鎖により、第一にイギリスの世界市場からの関係をたち切り、第二に国民経済の自立した体系を形成することができ、この双方から、国民福祉の確立がはかられるとするのである。このような商業封鎖という国家政策により、自給自足の国民経済という、一つの完全な生産の体系 (ein vollendetes System der Production) を構成する、³⁹⁾ という産業保護政策が志向されたのである。

「封鎖的商業国家」論は、本来、人間の自由を目標とするものであり、封建体制に基づく、重金主義や貿易差額論による重商主義政策を批判するものであった。しかしその内容は、スミス (Smith, Adam 1723-1790) による産業資本の論理的展開を意味するものでなく、経済の基盤は、農民と手工業者におかれ、商人の取引活動は、国家による規制が加えられるという「プロイセン型の道」を示していたのである。すなわち農業改革は、農奴制廃止勅令として行われ、さらにシュタインの後を継いだハルデンベルク (Hardenberg, Karl August 1750-1822) により、1811年に営業条例が出され、営業の自由が導入され、農民の身分的諸関係が整理された。⁴⁰⁾ このように「上」

からの改革は、自由主義的な市場経済の道をひらくとともに……農業の資本主義化政策⁴³⁾を打ち出した。⁴²⁾そして国家による商業取引規制政策は、手工業と農業を発展させ、ドイツ商取引学の衰退⁴³⁾をもたらしたのである。しかしこのような国家による「上」からの改革を通して展開された国家主義的傾向も、人間の自由と幸福の追求を見失うことなく、国民を国家に吸収していくものとなり、⁴⁴⁾その結果、一つの方向としてフィヒテは、かれの国民論を形成するものとなったのである。そこでフィヒテは、フランス制圧下のドイツにおいて、人間の自由に基づく人類の解放とドイツ統一の実現のための手段として、ドイツ国民教育論を展開する。

3 国民論

フィヒテは、1807年12月13日から翌年の3月29日まで、ベルリン大学の大講堂に立ち、日曜日毎に14講にわたり、一身上の危険をおかしながら、全ドイツ国民に向けて「ドイツ国民に告ぐ」と題する講演を行った。⁴⁵⁾

フィヒテによれば、これまでの時代は、自由のないままに発展してきた時代で、⁴⁶⁾このような世界に対し、いったいわれわれは何をなすべきか、⁴⁷⁾と問いかけている。そして新しい時代(neue Zeit)は、自由と分別をもって人類が発展していく時代が来ており、この新しい時代をきりひらいていくという使命は、だれよりもドイツ人に課せられている、⁴⁸⁾としているのである。従ってこの講演の目的について、フィヒテは、敗戦国ドイツを考え、自己〔独立〕を失い、自分自身を失ってしまった〔ドイツ〕国民にとって、新しい自己〔独立〕と新しい時代を創造する手段を示すこと、⁴⁹⁾であるとしているのである。この目的達成のために、第一講で三つの条件を付けている。

一つは、フィヒテによれば、もっぱらドイツ人全体のために、ドイツ人全体について話す、⁵⁰⁾ということ、すなわちそれはドイツ精神(Deutschheit)というドイツ人に共通な根本的特徴による以外にない、⁵¹⁾としていることである。二つは、講演で前提とするドイツ人は、〔敗戦で〕身にうけた損失を悲しむのあまり、ドイツ人としての面目をまったく忘れた人々、この悲しみに自己満足している人々……でなく、悲しみを越えて、冷静に考え、観察することができる人々、⁵²⁾であること。三つは、ドイツの現状に対するはっきりとした認識を与えたいので、ドイツの現状を、自分自身の眼で見よう、⁵³⁾とし、真実をみる意志と勇気を持つ人々、⁵⁴⁾であること。そのために、講演では、訓話を必要とする倫理的観察でなく、単に歴史的観察が必要とされる、⁵⁵⁾としているのである。

この目的達成の手段として、何が求められるのか。その救済手段(Rettungsmittel)とは、国民をまったく新しい自我にまで教育することである。⁵⁶⁾すなわちドイツ国民を破滅から救う唯一の手段として、従来の教育制度の抜本的な改革(gänzliche Veränderung des bisherigen Erziehungswesens)を提案する、⁵⁶⁾としている。では新しい教育制度とは、何か。つまり新しい教育をうける生徒は、一般社会から隔離されて生活することで、生徒自身互いに共同生活を送ることである。……この〔共同〕社会は、事物の本質に基づき、理性の要求に完全に一致して、厳密

に定められた憲章 (Verfassung) をもつ、⁵⁷⁾ ものとなり、そこに新しい教育が達成される、とするのである。そこで新しい教育が目標にする道徳性の根源は、自制と克己、それに諸々の利己的衝動 (selbstsüchtig Triebe) を全体という概念の下に従属させることである。⁵⁸⁾ そしてほんとうの宗教心 (wahre Religion) を育てあげるための教育こそは、新しい教育の最後の仕事である、⁵⁹⁾ としている。

さらにフィヒテは、新しい教育では、ドイツ民族の特質として、生きた言語を有していること、⁶⁰⁾ ドイツ民族は祖国愛を有すること、⁶¹⁾ 思惟の世界こそが唯一の真の世界であり、これに対して、感覚的な世界はまったくとるにたりない世界であること、⁶²⁾ を認識する必要があるとする。また学校制度での新しい教育の内容として、三点挙げている。第一は、男女共学であること、⁶³⁾ 第二は、学習と労働が統一されること、⁶⁴⁾ 第三は、自給自足という経済教育 (wirtschaftliche Erziehung) ⁶⁵⁾を必要とすることである。

このようにしてフィヒテによれば、従来の教育の改革により、感覚的にのみ悟性の開発をめざす啓蒙思想⁶⁶⁾でなく、人間をつくり上げ、生徒の人格の一部とする新しい教育により、ドイツ人を一つの全体にまで統一しようとした⁶⁷⁾のである。

さて、フィヒテ講演が終わった5年後に、プロイセンは、解放戦争に勝利したが、その約100年後に、第一次大戦が勃発した。このドイツ存亡の危機にあって、ニックリッシュは、講演において、あたかもフィヒテがいうように、ドイツ人の新しい転換の道を求めて、ドイツ国家のために、ドイツ国民の在り方をドイツ人に問いかけるのである。

Ⅲ 第一次大戦とニックリッシュ

1 第一次大戦前とドイツ

1813年10月プロイセン、オーストリア、ロシア同盟軍は、ライプツィヒの会戦で、ナポレオン軍に大勝した。その後、プロイセンは、1834年関税同盟成立後、産業革命期に入り、1862年自由貿易政策を取るものとなり、農業資本主義から産業資本主義へと転換して行ったのである。

その後、1871年1月にプロイセンが、フランスに戦勝したことにより、対外的には、ドイツ、オーストリア、フランス、イギリス、ロシアのヨーロッパ五大列強国は、新たな外交方策を模索せざるをえなくなった。¹⁾ まずドイツは、東方で利害対立していたロシアとオーストリアの両国に接近し、1872年に三帝同盟 (Dreikaiserbündnis) の実現に成功したのである。これは神聖同盟の再版で、ヨーロッパの三大君主国が団結し、フランス共和主義に対抗しようとするものであった。しかしロシアとオーストリアの対立は解消されず、その後の1878年夏〔6月3日ー7月13日〕のベルリン会議 (Berliner Kongress) で三帝同盟は一時解消した²⁾ので、ビスマルク (Bismarck, Otto Fürst von 1815-1898) は、1879年10月7日に、ドイツとオーストリアの二国同盟を締結した。³⁾ その後、ドイツは、アジアとオリエントでのロシアとイギリスの対立を利用して、1881年6月18日に三帝同盟を復活させたのである。さらにベルリン会議の後、チュニジアを

めぐって、フランスとイタリアが対立することとなり、1882年5月20日ドイツとオーストリアは、イタリアとの三国同盟（Dreibund）を締結した。⁴⁾ その際、オーストリアとイタリアの対立は、棚上げとなっただけである。⁵⁾ ところでドイツは、イギリスと領土境界調整のため、1890年7月1日ヘルゴラント・ザンジバル条約を結んだが、この独英関係を見たロシアは、1894年1月にフランスと同盟を締結したのである。他方、イギリスは、ヴィルヘルム二世（Wilhelm II 1859-1941）とティルピッツ（Tirpiz, Alfred von 1849-1930）による艦隊政策を進めるドイツに対し、1898年、1899年、1901年と同盟交渉をするも失敗し、1902年1月30日に日英同盟を締結した。⁶⁾ 次いでイギリスは、1904年4月8日にフランスと、さらに1907年8月31日にロシアと協商を結び、ここに三国協商が成立した。この結果、ドイツは、国際的孤立を深めて行く¹⁾こととなったのである。⁷⁾

一方、オーストリアは、1908年10月5日セルビア人の多いボスニア・ヘルツェゴビナ二州を合併したため〔セルビアで〕反墮運動がはじまっていた。⁸⁾ そして1914年6月28日、サラエボ事件がついに発生し、オーストリアは、この事件をきっかけにして、ロシアの前哨セルビアを、政治勢力としての地位から追い落とそうとして、⁹⁾ 1914年7月28日オーストリア・ハンガリーは、セルビアに対して、宣戦を布告、ここに大戦が勃発した。ドイツは、この危機に際し、最後の同盟者を失うことを恐れて、オーストリアを全面的に支持すると確約した¹⁰⁾のである。しかしドイツとオーストリアの同盟国だったイタリアは、さしあたり中立にとどまったのである。¹¹⁾ このようにして1907年以降に現れた二つの同盟陣営は、〔第一次〕大戦へと突入¹²⁾したのである。

ドイツ参謀本部は、すでに大戦前から、対露仏二面作戦を想定し、ドイツ・オーストリアの中央同盟は、西部戦線、東部戦線で同時に戦うという「シュリーフェン（Schlieffen）計画」を策定していた。この計画では、西部戦線にドイツ軍の主力をおき、まずフランス軍を撃破したのち、全軍をあげて東部戦線に投入し、ロシア軍を破るという構想であった。¹³⁾ そして南東戦線（Operationen im Südosten）での作戦は、完全にオーストリアに任せるというものであった。¹⁴⁾ しかし開戦と同時に、ドイツの戦略的計算に反して、フランスに出動を要請された強力なロシア軍が、〔ルーマニアが中立のため〕南へ西へと押し寄せた。¹⁵⁾ また西部戦線でも、当初の構想では、中立国ベルギーを通過して、フランス軍の背面を突くという作戦であったが、〔イタリアが中立のため〕フランス軍の反撃〔1914年9月5日-12日〕に合い、ドイツ軍はマルヌ河でくい止められ、破れはしなかったが、勝利もえぬままに、いずれの戦線でも膠着状態となった¹⁶⁾のである。戦争は、早くも長期戦の様相を見せはじめた。

二つの同盟陣営は、このような膠着状態を打開しようとして画策したが、その一環として、三国協商は、南東戦線で次のような変化を起した。すなわち三国同盟の一員であったイタリアは、〔領土的野心として〕従来よりティロルとトリエステの併合をめざしていた。そしてそのためには、同盟の一員として行動することが義務づけられていたが、開戦時の1914年7月には中立を宣言していたのである。しかしイタリア政府は、その9ヶ月後の1915年4月26日に、三国協商との間で一つの条約を取り結んだ。このロンドン条約においてイタリアは、戦勝のあかつきには南ティロ

ルとトリエステさらにダルマニア地方が与えられることを前提として、1915年5月24日に、オーストリアとの戦争に突入したのである。¹⁷⁾ これに対し、ドイツ・オーストリア同盟は、あからさまにイタリアの「裏切り」をののしった。¹⁷⁾ 一方、イタリア国内の世論は、大戦勃発以来、中立維持か、英仏側に立っての参戦かでまっぴたつに割れていた。¹⁸⁾ このような国内外の事態に対し、イタリア政府、サランドラ (Salandra, Antonio 1853-1931) 首相は、1915年6月2日、ローマの議事堂に歓呼の声をあげる聴衆に向かって宣言した。「我々の戦争は、〔三国協商との条約を守るという〕神聖なる戦いである！」¹⁹⁾ と。そこで翌月の7月3日、ドイツ国民の一人、ニックリッシュ学長は、イタリア人のサランドラ首相は、〔条約を守るという〕神聖なる利己心 (Egoismus) をかれらの旗標としている、²⁰⁾ とし、利己心が人類にとりいかなる意味を有するかについて、マンハイム商科大学開学年次式典に参席したドイツ国民に対し、講演を行ったのである。

2 ニックリッシュの講演・利己心と義務感

講演という概念について、ドイツ近代哲学者の一人でもあるオイケンは、1925年にフィヒテの「ドイツ国民に告ぐ」のために書いた解説のはじめに「およそ講演と名のつくものは、そのときの瞬間的な状況にしばられて生まれてくるもの」²¹⁾ であるとしている。しかも講演は、その「瞬間的な状況にしばられて生まれて」きたという、まさにその理由によって、永続的な価値をもっている、²²⁾ とされているのである。確かにフィヒテの講演をしばった瞬間的な状況は、フランス革命とフランス制圧化のドイツの危機であつた。これに対し、ニックリッシュの講演をしばった瞬間的な状況は、第一次大戦の勃発とイタリアの参戦だったのである。しかもイタリアの参戦とサランドラ首相の演説を受けて行われたこの講演において、ニックリッシュは、大戦中敵対する三国協商のフランス、ロシアおよびイギリスを取り上げず、一ヶ月前まで同盟国だったイタリア人とその政府の名のみを挙げて非難している。この限りで、ニックリッシュの講演も、特殊的な歴史的状況にしばられていることにより、永続的価値を付与されると考えられるといつてよいであろう。

そこで、講演の瞬間的な状況を全体に相互関連づけて理解する²³⁾ ためにも、ニックリッシュ講演録「利己心と義務感」の全容を以下に示そうとするものである。

この講演は、四つの部分より構成されている。それは、1 戦争、2 利己心、3 義務感および 4 商科大学教育である。

1 戦争

ニックリッシュによれば、この講演は、1915年7月3日、マンハイム商科大学開学年次式典での祝賀講演である。この講演には、次の三つの特徴が認められる。第一に、大学活動を集約し、全体として相互関連づけ、大学を活性化させるためのものであること。第二に、文部省、マンハイム市民に対するマンハイム商科大学との関係づけを育成するための機会とするものであること。²⁴⁾第三に、途方もない世界史的出来事〔第一次世界大戦〕から感銘を受けつつあるということ

である。……とはいっても、私達〔ドイツ国民〕が目標とする平和は、今だ達成されていないので、この大学の祝賀会は、平和の前祝いとはならない。……それで、商科大学も、全面的に〔戦争を〕戦い抜くという暫定的意味が、さらにこの式典に加わる、²⁶⁾とする。……そのために、私達は、〔戦争を〕戦い抜こうとする力を何処から手に入れるか、これが重要である、²⁶⁾と問題提起するのである。

まず戦争について、〔ドイツに新たに〕攻撃してくる敵、イタリア人の首相〔サランドラ〕は、〔三国協商との条約を守るために〕神聖であると語った利己心〔領土的野心〕を旗標としている。しかし利己心は、イタリア人を国民的目標へ導くか、まだ立証されていない、とし、それでは何が、私達〔ドイツ国民〕をすでにほとんど12ヶ月間戦い抜かせ、最後まで、確実に抵抗力を有し、勝利をえるように導くのか、²⁶⁾としている。

それは、利己心なのか、利己心とは、何であるのか、利己心は〔サランドラ首相がいうようにはたして〕神聖でありうるのか、とし、このことを確定するのは今日、困難ではない、とする。それは時代の〔戦争という世界史的〕出来事が、私達〔ドイツ国民〕に人間（人類）の普遍的問題をより詳しくもたらし、私達〔ドイツ国民〕の判断を鋭くしたから²⁶⁾である。……そしてカントの精神〔良心〕は、時代の司祭として未来の道を示す予言者として、私達〔ドイツ国民〕の中に存在している、²⁷⁾としているのである。

2 利己心

第二に利己心とは、何であるのか。……人間の行為は、〔本来〕肉体的現存在、感性的自我と人間の義務意識（Pflichtbewußtsein）という二つの源泉から流出する。そのうち感性的自我の愛着（傾向性 Neigung）と欲望の育成への個人の活動は、利己心である。……利己心の最も完全な目標は、感性的な欲求の充足（Befriedigung der sinnlichen Bedürfnisse）における調和としての幸福である。……しかしこの至福の絶頂においてさえ、利己心は、その本質において、自我を越えて行かない。²⁷⁾ 利己心は、全体でなく、自我のみを認める。²⁸⁾ 従って自我を一因とする利己心は、より重要な全体に対して、直接的な関係を少しも有しない、²⁸⁾とする。……それゆえ利己主義者固有の絶望的な破綻は、不自然な結末として、利己主義者のために〔他人の〕犠牲を伴う、³⁰⁾とするのである。従って利己心という泉から、ドイツ国民は戦争を戦い抜く力を汲み出すことはできない。

3 義務感

利己心に対立して、義務感の活動が位置付けられる。……義務は、道徳的法則〔当為〕と意志との一致から生じるものである。従って義務の概念には、利己心の余地は、少しもないのである。³¹⁾

では義務感とは何か。義務の最深の本質は、全体に対する個人の最も純粋な関係を理解し、表現することから、明白となる。〔すなわち〕個人は、個人の活動を全体から受取り、個人の活動を

全体に負っている。〔従って〕個人は、全体の一員なのである。しかも総体に対する個人のこの関係は、義務概念に含まれる、³¹⁾ とするのである。

ニックリッシュによれば、義務概念には、意志が重要であるとして、カントとフィヒテの義務概念を取り上げている。³¹⁾ カントの言明では、『実践理性批判』の結語からのもので「義務を伴う意志の自由とは、「悟性のみで考える事物の秩序 (Ordnung der Dinge) に人間を結びつける」ところの「人間の現存在 (人格性)」³²⁾ を重視することである。フィヒテの言明では、『人間の使命』第三卷信仰の部、第四章宗教的世界観からのもので、既述のように「義務と意志について〔義務と一致する無限的〕意志は、私を自己自身と結び付け、その同じ〔無限的〕意志は、私を私のような人々のすべての究極的な本質と結び付け、私達のすべての普遍的な媒介者である、³³⁾ と説明している。

このことから義務の本質は、人間が、義務感により、自ら活動する点にあり、人間が自らの犠牲の行為 (Tat der Opferung) を、また〔犠牲の〕遂行が義務感を必要とするところでは、自己犠牲 (Selbstaufopferung) を、起させるところのものである。³⁴⁾ このようにして、国家は、義務を意識して、義務の本質から日々新たに生み出される土台 (Grundlage) に支えられている。³⁵⁾純粋に義務的な人間の行動は、完全なる国家を無難な場所に移すものである。.....そこで、義務的な行動と利己心の関係が、問題となる。ここでイタリア政府の〔三国協商との条約を守ると〕いう「神聖」なる利己心³⁶⁾ が問題となり、.....戦争と危機のこの重大な時代でさえも、私達〔ドイツ国民〕にも、利己的な活動の多数の事例が、挙げられる、³⁷⁾ とする。

しかしニックリッシュによれば、それにもかかわらず、義務の意識は、ドイツ諸国民に深淵に生きているのである。.....私達〔ドイツ国民〕は、そのような〔義務〕意識から、そこにある〔戦争の〕勝利に至る〔平和の〕目標まで、抵抗し、常に新しい力を汲み取るのである。それゆえ私達〔ドイツ国民〕は、生存する〔ドイツ〕国民に、関わりのある限り、フィヒテのドイツ国民に告ぐ、という講演に見られる楽天観 (Optimismus) を実現する、³⁸⁾ とするのである。

4 商科大学教育

第四に商科大学は、この〔戦争という〕事態に対して、どのような〔新しい教育〕態度を取るのか。.....米英同様、商科大学も、利潤追求する (Profitmachen) ことを講義するのか。³⁹⁾ ニックリッシュによれば、〔戦前に〕商科大学にとり、独自性を示す私経済学に対して、攻撃が向けられたことを回想し、これらの攻撃は、〔今日、商科大学の利己心と義務感の〕関係の議論に際して避けられえない、⁴⁰⁾ とするのである。

攻撃の指導者ブレンターノ (Brentano, Lujo 1844-1931) は、〔戦前の〕私経済学や経営科学の〔エーレンベルヒ (Ehrenberg, Richard 1857-1921)⁴¹⁾ に代表される〕研究者達が、全体〔福祉〕の代りに、企業の成果 (Erfolg des Unternehmens)〔利益〕を、経済的考察の出発点と目標点としたこと、⁴²⁾ そして真理への無前提的な研究の代わりに、利害代理人を置いた、と非難した。この非難は、商科大学の攻撃された人々は、或る人々の集団の利己的な努力の代弁者、企業者 (Unternehmer) であること、そしてかれらの教育と研究論文は、この〔企業者〕集団の利己心の

意見の開陳に進んで手段を提供しようとする、という主張なのである。⁴³⁾

しかしニックリッシュによれば、私達〔商科大学〕は、〔今日の〕教育と研究において、企業者でなく、むしろ企業を重視する、⁴³⁾ とする。……経営科学者にとり、企業は、企業者が労働者や職員を支配する搾取の手段でなく、むしろ組織化され、組織により活力ある統一に集約されるべき諸力の共同体（Gemeinschaft von Kräften）である。……企業者は、企業の一つの機関に過ぎないのである。⁴⁴⁾ そこで〔今日の〕私経済学者も、〔企業の〕研究に際し、まず第一に人間を見、全体に対する個人と人間集団の関係を見る。そして私経済学者の最高にして特別の課題は、全体を概観し、調査し、叙述することである。……このような共同体の考察により、私達、私経済学者も、義務の教官となるのである。⁴⁴⁾ ……私達〔私経済学者〕は、この〔義務の〕意識を〔商科〕大学の教育と活動において、さらに育成したいのである。このようにして私達〔私経済学者〕は、私達〔ドイツ国民〕が、……〔戦争を〕戦い抜くことができるということを、〔商科〕大学の私達も確信するものである、⁴⁵⁾ とするのである。

この講演において、ニックリッシュは、フィヒテ「ドイツ国民に告ぐ」に倣って、第一次大戦中のドイツ国の危機を、ドイツ国民の祖国愛と義務感に訴えようとしたのである。

IV 結

ニックリッシュ講演論文は、フィヒテの思想に関連して、いかに相互に関連付けられるべきか。講演に見られる最も重要な概念、義務感、義務の意識について、ニックリッシュによれば、ドイツ国民は、義務の意識から、戦争の勝利に至る目標まで抵抗し、常に新しい力を汲み取るのである、とし、それゆえ私達ドイツ国民は……フィヒテのドイツ国民に告ぐ、という講演にみられる楽天観を実現する、¹⁾ としていたのである。

ここに示めされている楽天観とは、現世を最善とみる観点、世界の最善観、また個人の道徳的努力によってしだいに最善に至るとみる改善観をいい、ライプニッツ（Leibniz, Gottfried Wilhelm Freiherr von 1646-1716）などにより正当化された²⁾ものである。ライプニッツのいう最善の世界観は、単なる世界の傍観的な見方ではなく、むしろ世界の内に理性的な実体として生きる人間が、そこで自己をいかに生かしてゆくか、そしてそれと共に世界をどのように開いてゆくか、という主体的な覚悟の表明の一つに成立していたのである。³⁾ 従ってライプニッツのいう最善とは、カントのいうように全体が最善であるためには部分も最善である、⁴⁾ というものではない。それは却って最善の既弱化として低視される。むしろ悪と混わり、苦悩を伴い、屈折を強いられながら、なおそれを越えて、全体、つまり善悪の二系列の葛藤とか混淆を業火の試練として突破した先端にあるのが、ライプニッツの考えた最善なのである。⁵⁾

それでは、カントから離れた後期フィヒテのドイツ国民に告ぐに見られる楽天観は、具体的にどのようなであったのか、さらにニックリッシュがフィヒテに倣って実現しようとする楽天観は、個別にどのようなであったのか。考察に際して、ここでは見逃されやすい両者の類似点のうちに、

それぞれの基本的性格を見てみよう。

フィヒテは、フランスに制圧されたドイツを悪い状態であるとし、フランスとドイツを次のように見ている。フィヒテによれば、現在我々が交渉している外国〔フランス〕の国民的統一は、おそれと希望（Furch und Hoffnung）を別とすれば、名誉と国民的名声（Ehreund und Nationalruhm）などという動機に基づいている。しかしこのような名誉と国民的名声などは、空虚な幻影に過ぎない。⁶⁾ もしもドイツという国家が、.....ドイツ人自身の支配を離れて、〔このような〕外国の支配下に立つようなことがあるとするなら、以後もその決定に当って、力を発揮するのは、ドイツ人の精神でなく、支配者たる外国の利害そのものである、⁷⁾ としていたのである。

一方、ニックリッシュは、第一次大戦中に新たにドイツに敵対するに至ったイタリアを危機的存在と見なし、そのイタリアとドイツの悪い状態を次のように見ていた。イタリアが戦争を戦い抜く力をどこから手に入れるのかについて、ニックリッシュによれば、イタリア政府は、神聖なる利己心に依存する。⁸⁾ 利己心は、しかも全体に対して、紛糾的、解体的、破壊的な効果を与え、.....国家においても同様の効果を与える、⁹⁾ 利己心がイタリア人を国民的目標へ導くはずである、¹⁰⁾ とするのである。フィヒテに倣って言い換えれば、ドイツが敗戦してイタリア政府を含む連合軍の支配下に立つとすれば、ドイツの未来はないということになるのである。

次にドイツに対する最善観、楽天観をフィヒテは、次のように見ている。フィヒテによれば、外国〔フランス〕との合併によっておこるであろう国民的崩壊を防ぎ、どのようなものにも依存しない完全な独自の自己の回復が可能だとするなら、それはただドイツ精神というドイツ人に共通な根本的特徴による以外にない。¹¹⁾ このような精神的な眼をもった人間にまで自分自身を作上げていくこと、これが自国の独立を失った.....国民に残されている確実にして唯一つの手段である、と。それは、従来の.....国民をまったく新しい生命にまで教育するという国民教育（Erziehung der Nation）である。¹²⁾ すなわち従来の教育が利己心に従って来たこと、¹³⁾ 決して人間を上げるための教育技術でなかったこと、¹⁴⁾ このような従来の教育制度の抜本的な改革、これこそがドイツ国民を破滅から救う唯一つの手段として¹⁵⁾ フィヒテが提案しようとしたものである。

他方、ニックリッシュは、楽天観を次のように見ている。ニックリッシュによれば、〔ドイツ〕諸国民への〔戦争の〕破滅の脅威には、途方もない犠牲に対する持続的な義務（fortdauernde Verpflichtung）が存在するのである。¹⁶⁾ そしてそこにある〔戦争の〕勝利に至る〔平和の〕目標まで、抵抗し、常に新しい力を私達〔ドイツ国民〕は、義務の意識から汲み取るのである、¹⁷⁾ とする。このようにして私達〔商科大学の〕私経済学者も義務の教官となる。たとえ〔戦前に〕商科大学で独自性を示す私経済学に対して攻撃が向けられた¹⁸⁾ にせよ、〔商科大学での〕私経済学者の最高の課題は、全体を観察し、調査し、叙述する¹⁹⁾ ことである。このような従来の商科大学教育の抜本的な改革こそが、ニックリッシュの提案なのである。そしてこの商科大学共々、ドイツ国民が義務の意識に基づくことにより、ドイツ国民に相応しい未来への栄光と輝く希望も存在している、²⁰⁾ とするのである。

かってフランス制圧下のドイツにあって、フィヒテは、ドイツ精神に基づく新しい国民教育を手段として、ライプニッツのいう楽天観を実現しようとしていたのに倣って、ニックリッシュは、第一次大戦中、イタリアが敵側に回るといふ苦難にあって、義務観に基づく商科大学の研究と教育の改革を手段として、フィヒテのいう楽天観としての理想主義を継承し、実現しようとしたといつてよいであろう。

注

I 序

- 1) 私経済学論争の研究については、例えば次の文献参照した。岡本人志「経営経済学の形成」森山書店、1977年、第1部 私経済学と私経済学論争、34-39、58-61、75-76、100-103ページ。岡田昌也「経営経済学の生成」森山書店、1978年、第10章 私経済学論争の展開(1)(2)、323-420ページ。中村常次郎「ドイツ経営経済学」東京大学出版会、1982年、第2章第4節 私経済学の性格をめぐる論争、93-113ページ。森哲彦「経営学史序説—ニックリッシュ私経済学論—」千倉書房、1993年、第1章 経営学史の研究方法与課題、8-10ページ、第8章 私経済学論争の展開、279-308ページ。
- 2) Nicklisch, Heinrich, *Allgemeine kaufmännische Betriebswirtschaftslehre als Privatwirtschaftslehre des Handels (und der Industrie)*, I Bd., Leipzig 1912.
- 3) Nicklisch, *Der Weg aufwärts! Organisation. Versuch einer Grundlegung*, Stuttgart 1920. 鈴木辰治訳、ニックリッシュ「組織 向上への道」未来社、1975年。
- 4) Nicklisch, *Wirtschaftliche Betriebslehre*, 5 Aufl., der allgemeine kaufmännischen Betriebslehre, Stuttgart 1922.
- 5) Nicklisch, Rede über Egoismus und Pflichtgefühl gehalten von H. Nicklisch, Mannheim, in, *ZfHH.*, 8 Jg., Heft 5. Leipzig August 1915. (abgek. Rede). und *Festansprache über Egoismus und Pflichtgefühl gehalten vom Rektor Professor Dr. Nicklisch bei der Jahresfeier der Handels-Hochschule am 3. Juli 1915*. Sonderdruck aus dem Jahresbrecht der Handels-Hochschule Mannheim über das Studienjahr 1914/15. (abgek. Festansprache). 森哲彦訳、ニックリッシュ 利己心と義務感「研究紀要」(名古屋市立女子短期大学)第59集、1996年3月。最新訳が以下のように刊行されている。渡辺朗訳、ハインリッヒ・ニックリッシュ 利己主義と義務感、大橋昭一編著、渡辺朗監訳「ニックリッシュの経営学」所収、同文館、1996年8月。
- 6) Schönplugh, Fritz, *Das Methodenproblem in der Einzelwirtschaftslehre*, Eine dogmenkritische Untersuchung, C. E. Poeschel Verlag, Stuttgart 1933. S. 195. 2 Aufl., 1954. (第二版) 古林喜楽監修、大橋昭一・奥田幸助訳、シェーンプルーク「経営経済学」有斐閣、1970年、174ページ。
- 7) 望田幸男、十八世紀ドイツの思想「世界歴史 岩波講座17、近代4 近代世界の展開II」所収、岩波書店、1970年、205ページ。
- 8) Kant, Immanuel, *Kritik der praktischen Vernunft*, 1788. in, Kants Werke, Herausgegeben von Ernst Cassirer, IV Bd., 1922. (abgek. praktische Vernunft). 深作守文訳「実践理性批判」カント全集、第七巻、理想社、1965年。
- 9) 椎名萬吉、解説・フィヒテの生涯と国民教育思想、同訳「世界教育学選集56 ドイツ国民教育論 フィヒテ」所収、明治図書、1970年、208ページ。フィヒテの生涯では、1762年5月19日ザクセンのランメナウ村に生まれ、1780年にイエーナ大学神学部に入學、後にライプツィヒ大学に転學し、法律、言語学、哲学を修め、カントを知る。1794年、イエーナ大学助教授、1805年エアランゲン大学教授、1810年ベルリン大学教授、初代哲学部長、さらに学長に就任し、1814年1月29日チフスにて52才でベルリンに没する。

- Vgl., Fischer, K., Fichte, Johann Gottlieb, *Allgemeine deutsche Biographie*, 6 Bd., Leipzig 1887. S.761-771. u. Zeltner, Hermann, Fichte Johann Gottlieb, in, *NdB.*, Berlin 1961. S.122. Sp.1 -S.125. Sp.2
- 10) Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, 1781. in, Kants Werke, Herausgegeben von Ernst Cassierer, III Bd., 1922. 原佑訳「純粹理性批判」カント全集、第四・五・六巻、理想社、1973年。
- 11) Heine, Heinrich, *Zur Geschichte der Religion und Philosophie in Deutschland*, 1834. Herausgegeben von eingeleitet von Wolfgang Harich, in, Sammlung insel 17, Berlin 1965. S. 165. 伊東勉訳「ハイネ ドイツ古典哲学の本質」岩波文庫、1951年、158ページ。
- 12) Ebenda, S.170. 同上訳、164 ページ。
- 13) Fichte, Johann Gottlieb, *Die Bestimmung des Menschen*, 1800. in, Fichte Werke, Herausgegeben von Immanuel Hermann Fichte, II Bd., Berlin 1971. (abgek. Menschen). 量義治訳、人間の使命「フィヒテ シェリング 世界の名著続9」中央公論社、1974年。
- 14) Fichte, *Reden an die deutschen Nation*, 1808. in, Fichte Werke, Herausgegeben von Immanuel Hermann Fichte, VII Bd., Berlin 1971. (abgek. Reden). 椎名萬吉、前掲訳。
- 15) Fichte, *Der geschlossene Handelsstaat*, Ein philosophischer Entwurf als Anhang zur Reichslehre und Probe einer künftigen zu liefernden Politik, 1800. in, Fichte Werke, Herausgegeben von Immanuel Hermann Fichte, III Bd., Berlin 1971. (abgek. Handelsstaat). 出口勇蔵訳「フィヒテ封鎖商業国家論」弘文堂、新装版、1967年。

II ナポレオン戦争とフィヒテ

- 1) Raff, Diether, *Deutsche Geschichte - Vom Alten Reich zur Zweiten Republik*, 2 Aufl., Max Hueber Verlag, München 1987. S.60. (abgek. Deutsche Geschichte). 松本彰・芝野由和・清水正義訳「ドイツ近現代史」シュブランガー・フェアラーク東京株式会社、1990年、39上ページ。
- 2) Ebenda, S. 61. 同上訳、39下ページ。
- 3) 木谷勤・望田幸男編「ドイツ近代史-18世紀から現代まで-」所収、ミネルヴァ書房、1992年、望田幸男、第一章第一節「上」からの改革、33ページ。
- 4) Raff, ebenda, S.62. 前掲訳、40上ページ。
- 5) 大橋武夫「クラウゼヴィッツ兵法-ナポレオンに勝った名参謀の戦略」マネジメント社、1980年、55ページ。
- 6) 木谷勤・望田幸男編、前掲書、34ページ。
- 7) Raff, ebenda, S.64. 前掲訳、42下ページ。
- 8) Ebenda, S.64. 前掲訳、43上ページ。
- 9) Ebenda, S.67-68. 前掲訳、44下-46上ページ。
- 10) 望田幸男・三宅正樹編「概説ドイツ史-現代ドイツの歴史的理解-」所収、有斐閣選書、1982年、中山治一、第一章3 フランス革命後の国際政治とドイツ、42ページ。
- 11) Raff, ebenda, S.65. 前掲訳、43下ページ。
- 12) Ebenda, S.66. 前掲訳、44上ページ。
- 13) 桑木厳翼「哲学史割記」小山書店、1943年、94ページ参照。
- 14) フィヒテ、前期の主たる作品は、次のものである。*Versuch einer Kritik aller Offenbarung*, 1792. 「あらゆる啓示の批判の試み」。*Einige Vorlesungen über die Bestimmung des Gelehrten*, 1794. 宮崎洋三郎訳「学者の使命 学徒の使命」岩波文庫、1942年。*Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre*, 1794. 木村素衛訳「全知識学の基礎」上下巻、岩波文庫、1949年。
- 15) 望田幸男、前掲稿、十八世紀ドイツの思想、205ページ。

- 16) 桑木厳翼、前掲書、62ページ。
- 17) 同上書、60ページ。
- 18) フィヒテ「人間の使命」の研究については、例えば次の文献を参照した。桑木厳翼、前掲書、人間の使命、59-91ページ。岡田勝明「フィヒテ討究」創文社、1990年、附論 第一節 己事究明としての「知識学」、168-172ページ。福吉勝男編「ドイツ観念論と現代」所収、晃洋書房、1994年、福吉勝男、フィヒテ人間倫理観の特徴、6-7ページ。
- 19) Fichte, Menschen, S.172. 前掲訳、111下ページ。
- 20) Ebenda, S.193. 前掲訳、131上ページ。
- 21) Ebenda, S.195. 前掲訳、133上ページ。
- 22) Ebenda, S.198. 前掲訳、136上ページ。
- 23) Ebenda, S.246. 前掲訳、180ページ。
- 24) 桑木厳翼、前掲書、63ページ参照。
- 25) Nicklisch, Rede, S.102. Sp. 2. u. Festabsprache, S. 4. 森哲彦訳、16ページ
- 26) Fichte, ebenda, S.299. 前掲訳、229上ページ。
- 27) 桑木厳翼、前掲書、63ページ参照。
- 28) 望田幸男、前掲稿、206ページ参照。
- 29) 桑木厳翼、前掲書、95ページ。
- 30) フィヒテ「封鎖商業国家」論の研究については、例えば次の文献を参照した。桑木厳翼、前掲書、封鎖的商業国、92-106ページ。出口勇蔵、解説、出口勇蔵、前掲訳、所収、57-68ページ。住谷一彦、第3章Ⅲ フィヒテの「封鎖商業国家」論 - 「国民経済」論の先駆形態、内田義彦・大野英二・住谷一彦・伊東光晴・平田清明「経済学史 経済学 全集3」所収、筑摩書房、1970年、168-175ページ。糸康弘「ドイツ観念論の歴史的 성격」勁草書房、1987年、近代ゲマインシャフトと国民経済の構想-フィヒテ国民経済の旋回-、142-173ページ。廣松渉・坂部恵・加藤尚武編「講座ドイツ観念論 第三巻-自我概念の新展開」所収、弘文堂、1990年、大平伍郎、フィヒテの社会思想における「理論」と「歴史」、◎「閉鎖商業国家」試論、149-175ページ。福吉勝男編、前掲書、福吉勝男、フィヒテ市民社会論の構想、8-15ページ。
- 31) Fichte, Handelsstaat, S. 422. 前掲訳、64-65ページ。
- 32) Ebenda, S. 421. 441. 前掲訳、62.97ページ。
- 33) 糸康弘、前掲書、156ページ参照。
- 34) Fichte, ebenda, S.446. 前掲訳、107ページ。
- 35) Ebenda, S.465. 前掲訳、143ページ。
- 36) Ebenda, S.468. 前掲訳、149ページ。
- 37) Ebenda, S.469. 前掲訳、151ページ。
- 38) ドイツ重商主義の産業保護政策に基づく商業論として、例えば次の文献が挙げられる。
Ludovici, Karl Günther, *Eröffnete Akademie der Kaufleute oder vollständiges Kaufmanns-lexicon*, 1752-1756. Büsch, Johann Georg, *Theoretisch-praktische Darstellung der Handlung in ihren mannichfaltigen Geschäften*, Hamburg 1792. Leuchs, Johann Michael, *System des Handels*, 1804.
Vgl. Weber, Eduard, *Literaturgeschichte der Handelsbetriebslehre*, Tübingen 1914. Seßfart, Rudolf, *Über Begriff und Aufgaben der Betriebswirtschaftslehre*, Stuttgart 1925. *Über Begriff, Aufgaben und Entwicklung der Betriebswirtschaftslehre*, 4 Aufl., 1957. (第4版) 鈴木辰治・森哲彦紹介(訳) 経営経済学 の概念・任務及び発展「立命館経営学」第9巻第2.3号、1970年8月。
- 39) Fichte, ebenda, S.503. 前掲訳、211ページ。
- 40) Raff, ebenda, S.68. 前掲訳、46上ページ。
- 41) 住谷一彦によれば、1807年のシュタイン・ハルデンベルク農地改革を起点とした「プロイセン型の道」

について、チューネンの著書「農業と国民経済における孤立国」(第一部1826年、第二部1850年、第三部1863年)には、プロイセン農業のいわゆる「近代化」過程の進展という歴史的事態の影響があったとみることは、ほぼ想像するにたたくないであろう、としている。このことは、経営学史上注目し得る、と思われる。住谷一彦、前掲稿、183ページ脚注参照。

- 42) 成瀬治・黒川康・伊東孝之「ドイツ現代史 世界現代史20」山川出版社、1987年、18ページ参照。
- 43) 19世紀商取引学の衰退については、次の文献を参照。Weber, ebenda, S.111-134. Seyffert, ebenda, 4 Aufl., S.42-44. 前掲稿、121-123ページ。
- 44) 望田幸男、前掲稿、201-207ページ参照。
- 45) フィヒテ「ドイツ国民に告ぐ」の研究については、例えば次の文献を参照した。務台理作「フィヒテ大教育家文庫16」岩波書店、1938年、〔復刻版〕1984年。梅根悟「西洋教育思想史3」誠文堂新光社、1969年、76-98ページ。椎名萬吉、前掲稿、解説・フィヒテの生涯と国民教育思想、199-223ページ。福吉勝男「自由の要求と実践哲学 J. G. フィヒテ哲学の研究」世界書院、1988年、第4章1節、3節、131-139、147-156ページ。
- 46) Fichte, Reden, S.306. 前掲稿、60ページ。
- 47) Ebenda, S.279. 前掲稿、27ページ。
- 48) Ebenda, S.306. 前掲稿、60ページ。
- 49) Ebenda, S.265. 前掲稿、11ページ。
- 50) Ebenda, S.266. 前掲稿、11ページ。
- 51) Ebenda, S.266. 前掲稿、12ページ。
- 52) Ebenda, S.267. 前掲稿、13ページ。
- 53) Ebenda, S.268. 前掲稿、14ページ。
- 54) Ebenda, S.269. 前掲稿、16ページ。
- 55) Ebenda, S.269. 前掲稿、15ページ。
- 56) Ebenda, S.274. 前掲稿、21ページ。
- 57) Ebenda, S.293. 前掲稿、44ページ。
- 58) Ebenda, S.417. 前掲稿、125ページ。
- 59) Ebenda, S.289. 前掲稿、51ページ。
- 60) Ebenda, S.237. 前掲稿、87ページ。
- 61) Ebenda, S.384. 前掲稿、92ページ。
- 62) Ebenda, S.401. 前掲稿、102ページ。
- 63) Ebenda, S.422. 前掲稿、131ページ。
- 64) Ebenda, S.423. 前掲稿、132ページ。
- 65) Ebenda, S.423. 前掲稿、132-133ページ。
- 66) Ebenda, S.272. 前掲稿、19ページ。
- 67) Ebenda, S.276. 前掲稿、23ページ。

Ⅲ 第一次大戦とニックリッシュ

- 1) Raff, Deutsche Geschichte, S.196. 前掲稿、162下ページ。
- 2) Ebenda, S.202. 前掲稿、167上ページ。
- 3) Ebenda, S.202. 前掲稿、167下ページ。
- 4) Ebenda, S.203. 前掲稿、168下ページ。
- 5) 森田鉄郎・重岡保郎「イタリア現代史 世界現代史22」山川出版社、1977年、155-156ページ。
- 6) 望田幸男・三宅正樹編、前掲「概説ドイツ史」153ページ。

- 7) 同上書、154ページ。
- 8) 矢田俊隆・田口晃「オーストリア・スイス現代史 世界現代史25」山川出版社、1984年、オーストリア I、2 十九世紀から第一次世界大戦まで、49-50ページ参照。
- 9) Raff, ebenda, S.260. 前掲訳、219下ページ。
- 10) 望田幸男・三宅正樹編、前掲書、154ページ。
- 11) Raff, ebenda, S.261. 前掲訳、221上ページ。
- 12) Ebenda, S.262. 前掲訳、222上ページ。
- 13) 木谷勤・望田幸男編、前掲「ドイツ近代史」第2章第2節 ヴィルヘルム時代、73ページ。
- 14) Raff, ebenda, S.265. 前掲訳、224上ページ。
- 15) Ebenda, S.266. 前掲訳、225上ページ。
- 16) 木谷勤・望田幸男編、前掲書、74ページ。
- 17) Procacci, Giuliano, *Histoire des Italiens* (2 tomes), Paris 1970. 豊下櫛彦訳、G プロカッチ「イタリア人民の歴史Ⅱ」未来社、1984年、244ページ。
- 18) 藤沢道雄「ファシズムの誕生—ムッソリーニのローマ進軍」中央公論社、1987年、4ページ。
- 19) Gallo, Max, *L'Italie de Mussolini*, Paris 1964. p.68. and *Mussolini's Italy*, Macmillan 1973. p.46. 木村裕訳、マクス・ガロ「ムッソリーニの時代」文芸春秋、1987年、49上ページ。
- 20) Nicklisch, Rede, S.101. Sp.2. u. Festansprache, S.2. 森哲彦訳、14ページ。
- 21) 篠原正瑛、フィヒテ解説「世界大思想全集 哲学・文芸思想編、第11巻」所収、河出書房、1955年、429ページ。
- 22) 同上稿、430ページ。
- 23) ニックリッシュ「利己心と義務感」の研究については、例えば次の文献を参照した。大橋昭一「ドイツ経営共同体論史—ドイツ規範的经营学研究序説—」中央経済社、1960年、第5章 ニックリッシュ経営共同体論の形成過程、170-174ページ。岡田昌也、前掲書、第11章 私経済学論争の展開、391-393ページ。中村常次郎、前掲書、第2編 第1章 ニックリッシュ「経済的经营」論、171-176ページ。森哲彦、前掲書、第8章Ⅳ ラーテナウの主張とニックリッシュの転向、299-302ページ。岡田昌也「経営学の基本問題」森山書店、1994年、第9章Ⅲ ニックリッシュⅡへの跳躍、Ⅳ 結、201-212ページ。吉田和夫「ドイツの経営学」同文館、1995年、第2部第3章Ⅱ ニックリッシュの背景、Ⅲ 向上の道としての組織論、72-80ページ。永田誠、ニックリッシュ「利己主義と義務感」について「経済研究」(大阪府立大学) 第41巻第2号、1996年3月、1-15ページ。
- 24) Vgl. Nicklisch, Rede, S.101. Sp.1. u. Festansprache, S.1. 前掲訳、13ページ。
- 25) Nicklisch, Rede, S.101. Sp.2. u. Festansprache, S.2. 前掲訳、14ページ。
- 26) Vgl. Nicklisch, Rede, S.102. Sp.1. u. Festansprache, S.2. 前掲訳、14-15ページ。
- 27) Nicklisch, Rede, S.102. Sp.1. u. Festansprache, S.3. 前掲訳、15ページ。
- 28) Nicklisch, Rede, S.102. Sp.2. u. Festansprache, S.5. 前掲訳、16ページ。
- 29) Nicklisch, Rede, S.102. Sp.1. u. Festansprache, S.3. 前掲訳、15ページ。
- 30) Nicklisch, Rede, S.102. Sp.2. u. Festansprache, S.4. 前掲訳、15ページ。
- 31) Nicklisch, Rede, S.102. Sp.2. u. Festansprache, S.4. 前掲訳、16ページ。
- 32) Kant, praktische Vernunft, S.288-290. 前掲訳、368-369ページ。
- 33) Fichte, Menschen, S.299. 前掲訳、229 上ページ。
- 34) Nicklisch, Rede, S.102. Sp.2. u. Festansprache, S.4. 前掲訳、16ページ。
- 35) Nicklisch, Rede, S.102. Sp.2. u. Festansprache, S.5. 前掲訳、16ページ。
- 36) Nicklisch, Rede, S.103. Sp.1. u. Festansprache, S.5. 前掲訳、17ページ。
- 37) Nicklisch, Rede, S.103. Sp.1. u. Festansprache, S.6. 前掲訳、17ページ。
- 38) Nicklisch, Rede, S.103. Sp.1. u. Festansprache, S.6. 前掲訳、17ページ。

- 39) Nicklisch, Rede, S.103. Sp. 2. u. Festansprache, S.6. 前掲訳、18ページ。
- 40) Nicklisch, Rede, S.103. Sp. 2. u. Festansprache, S.7. 前掲訳、18ページ。
- 41) Ehrenberg, Richard, Keine "Privatwirtschaftslehre" !, in, BA., 12Jg., Nr. 4. 1912.
- 42) Brentano, Lujo, Privatwirtschaftslehre und Volkswirtschaftslehre, in, BA., 12Jg., Nr. 1. 1912. 奥田治人訳、ルーヨ・ブレンターノ 私経済学と国民経済学「千里山商学」(関西大学大学院) 第42号、1996年9月。
- 43) Nicklisch, Rede, S.103. Sp. 2. u. Festansprache, S. 7. 前掲訳、18ページ。
- 44) Nicklisch, Rede, S.104. Sp. 1. u. Festansprache, S. 8. 前掲訳、19ページ。
- 45) Nicklisch, Rede, S.104. Sp. 2. u. Festansprache, S. 9. 前掲訳、19ページ。

IV 結

- 1) Nicklisch, Rede, S.103. Sp. 1. u. Festansprache, S. 6. 森哲彦訳、17ページ。
- 2) 森宏一・古在由重編「哲学辞典」青木書店、1971年、495ページ参照。
- 3) 田中英三「ライプニッツ的世界の宗教哲学」創文社、1977年、15ページ。
- 4) 同上書、337ページ。
- 5) 同上書、331-332ページ。
- 6) Fichte, Reden, S.277-278. 前掲訳、25ページ。
- 7) Ebenda, S.398. 前掲訳、98ページ。
- 8) Nicklisch, Rede, S.103. Sp. 1. u. Festansprache, S. 5. 前掲訳、17ページ。
- 9) Nicklisch, Rede, S.102. Sp. 2. u. Festansprache, S. 5. 前掲訳、16ページ。
- 10) Nicklisch, Rede, S.102. Sp. 1. u. Festansprache, S. 2. 前掲訳、14ページ。
- 11) Fichte, Reden, S.266. 前掲訳、12ページ。
- 12) Ebenda, S.274. 前掲訳、21ページ。
- 13) Ebenda, S.275. 前掲訳、22ページ。
- 14) Ebenda, S.276. 前掲訳、23ページ。
- 15) Ebenda, S.274. 前掲訳、21ページ。
- 16) Nicklisch, Rede, S.101. Sp. 2. u. Festansprache, S. 2. 前掲訳、14ページ。
- 17) Nicklisch, Rede, S.103. Sp. 1. u. Festansprache, S. 6. 前掲訳、17ページ。
- 18) Nicklisch, Rede, S.103. Sp. 2. u. Festansprache, S. 6. 前掲訳、18ページ。
- 19) Nicklisch, Rede, S.104. Sp. 1. u. Festansprache, S. 8. 前掲訳、19ページ。
- 20) Nicklisch, Rede, S.101. Sp. 2. u. Festansprache, S. 2. 前掲訳、14ページ。

引用文献

- 荒松雄他編「岩波講座 世界歴史17 近代4 近代世界の展開Ⅱ」岩波書店、東京 1970年。
- Brentano, Lujo, Privatwirtschaftslehre und Volkswirtschaftslehre, in, BA., 12Jg., Nr. 1. 1912. 奥田治人訳、ルーヨ・ブレンターノ 私経済学と国民経済学「千里山商学」(関西大学大学院) 第42号、1996年9月。
- Büsch, Johann Georg, *Theoretisch-praktische Darstellung der Handlung in ihren mannichfaltigen Geschäften*, Hamburg 1792.
- 出口勇蔵, 解説・フィヒテ封鎖商業国家論、同訳、フィヒテ「封鎖商業国家論」所収、弘文堂、東京 1933年、新装版、1967年。

- Ehrenberg, Richard, Keine "Privatwirtschaftslehre"! in, *BA.*, 12Jg., Nr. 4. 1912.
- Fichte, Johann Gottlieb, *Versuch einer Kritik aller Offenbarung*, 1792.
- , *Einige Vorlesungen über die Bestimmung des Gelehrten*, 1794. 宮崎洋三郎訳「学者の使命 学徒の使命」岩波文庫、東京、1942年。
- , *Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre*, 1794. 木村素衛訳「全知識学の基礎」上下巻、岩波文庫、東京 1949年。
- , *Die Bestimmung des Menschen*, 1800. in, *Fichte Werke*, Herausgegeben von Immanuel Hermann Fichte, II Bd., Berlin 1971. 量義治訳、人間の使命「フィヒテ シェリンク 世界の名著続9」所収、中央公論社、東京 1974年。
- , *Der geschlossene Handelsstaat*, Ein philosophischen Entwurf als Anhang zur Reichslehre und Probe einer künftigen zu liefernden Politik, 1800. in, *Fichte Werke*, Herausgegeben von Immanuel Hermann Fichte, III Bd., Berlin 1971. 出口勇蔵訳、フィヒテ「封鎖商業国家論」弘文堂、東京 1933年、新装版、1967年。
- , *Reden an die deutschen Nation*, 1808. in, *Fichte Werke*, Herausgegeben von Immanuel Hermann Fichte, VII Bd., Berlin 1971. 椎名萬吉訳、ドイツ国民に告げる「世界教育学選集56 ドイツ国民教育論 フィヒテ」所収、明治図書、東京 1970年。
- Fischer, K., Fichte, Johann Gottlieb, *Allgemeine deutsche Biographie*, 6 Bd., Leipzig 1887. 藤沢道雄「ファッションの誕生—ムッソリーニのローマ進軍」中央経済社、東京 1987年。
- 福吉勝男「自由の要求と実践哲学 J. G. フィヒテ哲学の研究」世界書院、東京 1988年。
- 編、「ドイツ観念論と現代」晃洋書房、京都 1994年。
- Gallo, Max, *L'Italie de Mussolini*, Paris 1964. 木村裕訳、マクス・ガロ「ムッソリーニの時代」文芸春秋、東京 1987年。
- Heine, Heinrich, *Zur Geschichte der Religion und Philosophie in Deutschland*, 1834. Herausgegeben von eingeleitet von Wolfgang Harich. in, *Sammlung in sel* 17. Berlin 1965. 伊東勉訳「ハイネ ドイツ古典哲学の本質」岩波書店、東京 1951年
- 廣松渉・坂部恵・加藤尚武編「講座ドイツ観念論 第三巻—自我概念の新展開」弘文堂、東京 1990年。
- Kant, Immanuel, *Kritik der reinen Vernunft*, 1781. in, *Kants Werke*, Herausgegeben von Ernst Cassirer, III Bd., 1922. 原裕訳「純粹理性批判」カント全集、第四・五・六巻、理想社、東京 1973年。
- , *Kritik der praktischen Vernunft*, 1788. in, *Kants Werke*, Herausgegeben von Ernst Cassirer, IV Bd., 1922. 深作守文訳「実践理性批判・ほか」カント全集、第七巻、理想社、東京 1965年。
- 木谷勤・望田幸男編「ドイツ近代史—18世紀から現代まで—」ミネルヴァ書房、京都 1992年。
- 衆康弘「ドイツ観念論の歴史的 성격」勁草書房、東京 1978年。
- 桑木厳翼「哲学史叢記」小山書店、東京 1943年。
- Leuchs, Johann Michael, *System des Handels*, 1804.
- Ludovici, Karl Günther, *Eröffnete Akademie der Kaufleute oder vollständiges Kaufmannslexicon*, 1752-1756.
- 望田幸男・三宅正樹編「概説ドイツ史—現代ドイツの歴史的理解—」有斐閣選書、東京 1982年。
- 森宏一・古在由重編「哲学辞典」青木書店、東京 1971年。
- 森哲彦「経営学史序説—ニックリッシュ私経済学論—」千倉書房、東京 1993年。
- 森田鉄郎・重岡保郎「イタリア現代史 世界現代史22」山川出版社、東京 1977年。
- 務台理作「フィヒテ 大教育家文庫16」岩波書店、東京 1938年、〔復刻版〕1984年。
- 永田誠、ニックリッシュの「利己主義と義務感」について「経済研究」（大阪府立大学）第41巻第2号、1996

年3月。

中村常次郎「ドイツ経営経済学」東京大学出版会、東京 1982年。

成瀬治・黒川康・伊東考之「ドイツ現代史 世界現代史20」山川出版社、東京 1987年。

Nicklisch, Heinrich, *Allgemeine kaufmännische Betriebslehre als Privatwirtschaftslehre des Handels und (der Industrie)*, I Bd., Leipzig 1912.

——, Rede über Egoismus und Pflichtgefühl gehalten von H. Nicklisch, Mannheim. in, *ZfHH.*, 8 Jg., Heft 5, Leipzig August 1915. 森哲彦訳、ニックリッシュ 利己心と義務感「研究紀要」(名古屋市立女子短期大学)第59集、1996年3月。渡辺朗訳、ハインリッヒ・ニックリッシュ 利己主義と義務感、大橋昭一編著、渡辺朗監訳「ニックリッシュの経営学」所収、同文館、1996年8月。

——, *Festansprache über Egoismus und Pflichtgefühl gehalten vom Rektor Professor Dr. Nicklisch bei der Jahresfeier der Handels-Hochschule am 3. Juli 1915*. Sonderdruck aus dem Jahresbericht der Handels-Hochschule Mannheim über das Studienjahr 1914/15. 森哲彦訳、ニックリッシュ 利己主義と義務感、同上書。

——, *Der Weg aufwärts! Organisation*, Versuch einer Grundlegung, Stuttgart 1920. 鈴木辰治訳「組織 向上への道」未来社、東京 1975年。

——, *Wirtschaftliche Betriebslehre*, 5 Aufl., der allgemeine kaufmännischen Betriebslehre, Stuttgart 1922.

大橋昭一「ドイツ経営共同体論史—ドイツ規範的経営学研究序説—」中央経済社、東京 1960年。

大橋武夫「クラウゼヴィッツ兵法—ナポレオンに勝った名参謀の戦略」マネジメント社、東京 1980年。

岡田勝明「フィヒテ討究」創文社、東京 1990年。

岡田昌也「経営経済学の生成」森山書店、東京 1978年。

——, 「経営学の基本問題」森山書店、東京 1994年。

岡本人志「経営経済学の形成」森山書店、東京 1977年。

Procacci, Giuliano, *Histoire des Italiens* (2 tomes), Paris 1970. 豊下楯彦訳、G.プロカッチ「イタリア人民の歴史II」未来社、東京 1984年。

Raff, Diether, *Deutsche Geschichte—Vom Alten Reich zur Zweiten Republik*, 2 Aufl., Max Hueber Verlag, München 1987. 松本彰・芝野由和・清水正義訳「ドイツ近現代史」シュブランガー・フェアラーク東京株式会社、東京 1990年。

Schönflug, Fritz, *Das Methodenproblem in der Einzelwirtschaftslehre*, Eine dogmenkritische Untersuchung, Stuttgart 1933. 2 Aufl. 1954. (第2版) 古林喜楽監修、大橋昭一・奥田幸助訳、シェーンフルーク「経営経済学」有斐閣、東京 1970年。

Seßfart, Rudolf, 1957. *Über Begriff und Aufgaben der Betriebswirtschaftslehre*, Stuttgart 1925. u. *Über Begriff, Aufgaben und Entwicklung der Betriebswirtschaftslehre*, 4 Aufl., Stuttgart 1957. (第4版) 鈴木辰治・森哲彦紹介(訳) 経営経済学の概念・任務及び発展「立命館経営学」第9巻第2・3号、1970年8月。

椎名萬吉, 解説・フィヒテの生涯と国民教育思想、同訳、ドイツ国民に告げる「世界教育学選集56 ドイツ国民教育論 フィヒテ」所収、明治図書、東京 1970年。

篠原正瑛, フィヒテ解説「世界大思想全集 哲学・文芸思想編、第11巻」所収、河出書房、東京 1955年。

田中英三「ライプニッツ的世界の宗教哲学」創文社、東京 1977年。

内田義彦・大野英二・住谷一彦・伊東光晴・平田清明「経済学史 経済学全集3」筑摩書房、東京 1970年。

梅根悟「西洋教育思想史3」誠文堂新光社、東京 1969年。

Weber, Eduard, *Literaturgeschichte der Handelsbetriebslehre*, Tübingen 1914.

矢田俊隆・田口晃「オーストリア・スイス現代史 世界現代史25」山川出版社、東京 1984年。

吉田和夫「ドイツの経営学」同文館、東京 1995年。

Zeltner, Hermann, Fichte Johann Gottlieb, in, *NdB.*, Berlin 1961.

〔付記〕

本稿は、日本経営学会第174回中部部会、1995年12月16日報告、名古屋哲学研究会、1996年2月25日報告に基づいて、作成したものである。